欧州初期商業学の形成

齋　藤　光　正

はじめに

ドイツ経営経済学は，商科大学の設立とともに，20世紀初頭頃から長足の進歩を遂げ，他の多くの学問分野に匹敵するほどにその内容を深化拡大させてきた。しかしその前史を形成する商業学の時代においては，逆に斯学の進歩は極めて緩慢であった。商業学者たちは，先学の成果を全く活用できないか，あるいは活用できたとしても，部分的にしか活用できなかったうえ，同時代の他の研究者との意見交換においても恵まれていなかったからである。さらに彼らは通常，財政的援助を受けることも困難であったし，最新の科学技術を利用する機会にもあまり恵まれていなかった。これらの研究条件を考慮するならば，われわれは彼らの遺した成果に対して今日与えられている以上の評価を認めなければならないであろう。

本稿は欧州初期商業学について，それがどのような先駆者たちの手によって形成され，またいかなる特色をもつものであったかを考察するとともに，今日の経営経済学の中にいまなお保持されている彼らの業績を顧みることによって，その意義を正しく評価しようとするものである。ドイツ経営経済学の知識源泉は，周知のように主に三つの個別経済学，すなわち商業学，私経済学および工業経営学に求められるが，経営経済学はこのうち特に商業学から多大な影響を受けている。それ故その生成基盤を提供した欧州初期商業学の形成過程を取り上げることは必要かつ有意義のことと

思われる。今日の経営経済学は古き商業学との決別によって生成したと説き，後者の歴史を全く顧みない立場もあるが，筆者はむしろ既述のように商業学を経営経済学の知識源泉の一つとして考える立場から，本稿では商業学の歴史を過去の孤立した歴史として取り上げるのではなく，今日の経営経済学に関連させながら考察を進めることとする。

I　商業学の起源と時代区分

商業学の起源をいつの時代に求めるべきかについては，今日なお学者の間において意見が分かれている。ウェーバーは1914年に著した『商業経営学文献史』において商業経営学の発展段階を4期に区分し，第1期の「体系的試論の先駆者（17世紀まで）」において1335年から45年にかけてイタリアで書かれたペゴロッチ（Francesco Balducci Pegolotti）の手記を最初に取り上げている[1]。

当時のイタリアは商業の最も発達した国であったたため，手形，商業計算，簿記といった商業に関する諸知識は近隣諸国よりも進歩していた。しかし商業経営に関する知識は一般に著書として出版されることはなく，貨幣の換算，度量衡，取引上の必要事項等を記録したものが手記として大商人の家族のために残され，絶えず補完されていくにすぎなかった。しかもそれらは秘密事項とされていたため，一般の人々は通常それに接することは不可能であった。今日知られているペゴロッチの手記は，このような時代に成立した最古の私的記録として商業学的に意義をもつものである。それ故にウェーバーが商業学の起源をこの手記にまで遡って論じたことは，文献史的にみて適正なものであったといえよう。

ウェーバーのこのような見解を支持する学者としてはザイフェルトが挙げられる。学説に関する歴史的認識は経営経済的な文献，すなわちその学問的な，また実践的な文献から生じる[2]と考える彼は，著書『経営経済学史』（1971年）において，「最古の経営経済的専門書は誰もが入手しうる書物で

はなく，商業経験や商業知識についての私的記録である[3]」と主張し，そのうち今日知られている手記としてペゴロッチのそれを最初に取り上げている。

ライテラーはこれよりもさらに時代を遡り，中世のスコラ哲学における商業論から文献史を始めている。1961年に著された『商業経済および販売経済の文献史』の中の「第1章スコラ哲学の商業論」において，彼が最初に取り上げている学者はアウグスティヌスであり，そこではこの他にアレキサンダー・フォン・ハレス，トマス・フォン・アキナス，ハインリッヒ・フォン・ジェントなどを取り扱っている[4]。

ところで今日一般に「経済」または「経済性」を意味するÖkonomieという語は，古代ギリシャにおいては家内経済を意味していた。つまり個別経済の一形態を指していたのである。また「経済学」を意味するÖkonomikは，今日ではWirtschaftskundeやWirtschaftswissenschaftの同義語として全体経済的および個別経済的意味において用いられているが，この語も元来は家政経済学の意味をもっていた[5]。このことから個別経済学の歴史を推定するならば，恐らくそれは数千年前まで遡ることができるであろう。ベリンガーはその著書『経営経済学史』(1967年)において，経営経済学の発展段階を古代，中世および近代の3期に大別し，「古代史」の章の冒頭で最古の経営経済文献を紹介している。氏によれば，それは紀元前約3000年から2900年頃，スメル人によって書かれた点や線，印から成る経営経済に関する決算書や一覧表だという。そして文字で書かれた人類最初の生活記録の一つは簿記であると述べている[6]。このように商業学の歴史を文献史的に遡るならば，その起源は紀元前数千年前に書かれたとされる日常生活に必要な経済的記録に求めることも可能である。

しかし経営経済学の史的研究にとって，商業学成立以前の商業に関する知識は極めて限定的な意義をもつにすぎない。それは次に掲げる理由からである。すなわち，第1に数千年に亙る時の経過によって経済状態が著しく変化しているため，初期の経営経済的文献は近代のそれとは全く異なっ

た前提の下に成立していると考えられること。第２に，学問の研究方法においても，初期の素朴な研究方法と高度に文明の発達した現代のそれとでは，その水準において比較にならないほどの開きがあるということ。第３に，古代の経営経済的文献は，通常断片的にしか利用できないため，その時代の経営経済に関する鳥瞰図を描くことも，またその時代の傑出した文献の後世への影響がどれほどであったかを知ることも，ほとんど不可能であるということ[7]。第４に，初期の文献で使用されている言語および表記方法に対して，われわれの使用する言語はその性格が全く異質であるため，文献の正確な理解において相当の制約を伴うということ。

従って古代および中世に属する経営経済文献の大半は，狭義の商業学あるいは旧経営経済学への影響からみて重大な損失にならない限り，これを考察から除外せざるをえないであろう。ただし９世紀から12世紀の間に生存したといわれるディマシュキー[8]によって書かれた『商業の美，良き商品と悪しき商品の知識ならびに商品詐欺師の偽造に関する指針[9]』は，商業文献として少なからぬ意義を有するものなので，取り上げることとする。同書は現存する世界最古の商業文献の一つであり，その内容の理論的水準も極めて高く，それ故にドイツおよびわが国の経営学者たちによって，簡単ではあるがしばしば取り扱われてきたからである[10]。

ところでわれわれが商業学の発展を段階づける場合，どのような時代区分が可能であろうか。1979年に『商業学300年』を著したズントホッフによれば，1200年頃から2000年頃をもって広義の商業学として捉えることができる。氏はこれをさらに次のように５段階に区分する。

第１期　商業誌の時代（1200年～1700年）

第２期　重商主義商業学の時代（1650年～1800年）

第３期　商業学の時代（1750年～1900年）

第４期　商業経済学の時代（1850年～2000年）

第５期　商経済学の時代（1950年～200Ｘ年）

氏のいう「商業学の300年」とは，サヴァリーの『完全なる商人』（初版）

が出版された1675年からザイフェルトの『商業経済論』（第5版）が出版された1972年までの約300年間のことである。ズントホッフによれば，この300年間が商業学の歴史にとって最も重要な，従って特に考察されるべき時代であるという。しかしそれとともに，これに影響を及ぼした前の時代つまり「商業誌の時代」や『商業経済論』が影響を与えた後の時代もまた無視することができないという。それ故に氏は商業学の歴史を広狭の二義において構成するのである。すなわち「重商主義商業学の時代」から「商業経済学の時代」までを「狭義の商業学の時代」と称し，「商業誌の時代」から「商経済学の時代」までを「広義の商業学の時代」と称するのである[11]。

しかし今日の経営経済学の時代区分においては，『完全なる商人』が出版された1675年からドイツ最初の商科大学が設立された1898年までを商業学の時代とし，1898年以降を経営経済学の時代と考えるのが通説となってきている[12]。近代経営経済学の起源を1898年に求めるこの見解は，経営経済学成立の形式的条件を重視するものである。経営の全体的問題領域に関して統一的見解を得ようと努めた著書が相次いで出版されたのは1910年から12年にかけてである。ヘラウアーの『世界商業論の体系』（1910年），シェーアの『一般商業経営学』（1911年）およびニックリッシュの『商業および工業の私経済学としての一般商事経営学』（1912年）などがこれである。従って経営経済学の本格的胎動をこれらの文献に結び付けて考えるならば，商業学（狭義）の時代は1910年頃まで続いていたと推定される。そこで本稿では商業学の時代の終期をやや繰り下げて1910年頃までとし，商業学（広義）の発展段階を次のように3段階に区分する。

第1期　商業誌の時代（1200年頃から1700年頃まで）

第2期　商業学（狭義）の時代（1675年から1910年頃まで）

第3期　経営経済学の時代（1898年以降）

今日の経営経済学の前身としてその意義を探求すべき個別経済的諸科学は近世初頭に登場してくるが，それ以降，近代経営経済学成立に至るまでの個別経済学の発展を概観するならば，それらは総括的に商業学として捉

えられる。これを時間的経過に従って区分するならば，商業誌および商業学（狭義）の時代に大別される。この両者はいずれも経営経済学の前身と呼ぶべきものであるが，経営経済学への直接的な影響力はもちろん時代的に近接する商業学（狭義）の方が大きい。しかしその商業学の生成・発展の基礎を提供したのは，商業誌の時代に属する諸文献である。よって本稿では商業誌の時代に生まれた諸文献に焦点をあて，それらがいかなる内容から成り，経営経済的にいかなる意義をもつものであったかを以下で検討することとする。

II　アラビアの商業書

イタリア諸都市が東方貿易で栄え始める少し前，海上および陸上交通の要衝に位置していたアラビアは，東西貿易によって繁栄の時代を迎えていた。世界最古の商業文献として知られている『商業の美，良き商品と悪しき商品の知識ならびに商品詐欺師の偽造に関する指針』は，その頃アラビア人アリー・アッ・ディマシュキー（Alī ad-Dimišqī）によって書かれたものである。氏の正確な生没は未詳であるが，9世紀から12世紀の間に生存したといわれている[13]。ダマスクスで起草されたと推定される『商業の美』は，カイロ校訂本で本文が70ページ，その他タイトルや目次などを含めると全体で75ページから成る書物であるが，その内容はおよそ次のような項目から構成されている[14]。なお（　）内はリッターによるものである。

- 財の実体について
- 多くの財貨による富の称賛
- なぜもの言わぬ財が必要か
- いかにしてもの言わぬ財を検査しその良し悪しを識別するか
- 商品について
- あらゆる商品に関する標準価格の認識
- 商品の品質の良し悪しについて

- 宝石—芳香—香料—繊維—食料その他—不動産—生存物
- 財貨入手の方式について
- 強権による取得について
- 練達した手段の（技術的な）さまざまな方法による取得について
- 強権と練達との結合による取得について
- 職業について
- 商人に対する有用な忠告—崇高にして全能なる神のお許しをもって—
- 商業のすばらしさ
- 商人の第一の様式，蔵持商人（集散地商人）について
- 第二の遍歴商人はいかに振舞うべきか
- 第三の仕立商人（輸出商人）はいかに振舞うべきか
- 商人の欲望に思惑をかける人々をいかに用心すべきか
- 愛想のよい詐欺者をいかに用心せねばならぬか
- 山師やかたりをいかに用心せねばならないか
- 信心ぶって俗世の幸福を得ようとする偽善者をいかに用心せねばならぬか
- 資産の保全
- 財貨の支出の際に何に用心せねばならぬか
- その際どう支出するかについての注意
- 資産の保持が必要なこと
- 資産のぞんざいな扱いや浪費の防止

ここでは本書の項目を記載されている順序に従って列挙したのであるが，これらの見出しから明らかなことは，内容構成が必ずしも整然とした順序では配列されていないということである。しかし本書はペンドルフやライテラーが指摘するように，大別すると四つの主要部分，すなわち商品学的・経済理論的・商業学的・教訓的部分から成ると考えられる[15]。そこで上記の項目をさらに内容別にグループ化し，論理的順序に従って配列し直すと，次のような構成となる[16]。

1．財の実体と富の称揚
2．もの言わぬ財の必要性とその識別
3．標準価格の認識，品質の良し悪し，商品の保管方法など
4．宝石，香料，繊維，金属，食品など
5．財貨入手の方式
6．商人に対する一般的忠告
7．商人の種類とそれに対する助言
8．詐欺に対する警告
9．資産の保全
10．財貨支出の際の注意
11．資産の保全に関する教訓

ここに挙げた見出しのうち，「3．標準価格の認識，品質の良し悪し，商品の保管方法など」は商品総論に相当する記述であり，「4．宝石，香料，繊維，金属，食品など」は商品各論ともいうべき内容である。また「6．商人に対する一般的忠告」や「8．詐欺に対する警告」，「10．財貨支出の際の注意」，「11．資産の保全に関する教訓」は，いずれも教訓的部分に属するものである。本稿は商業学の形成過程を課題とするので，教訓的部分への言及を省略し，特に経済理論的・商品学的・商業学的部分についてのみ，その内容をもう少し立ち入って検討することとする。

ディマシュキーは，『商業の美』の冒頭において，まず財という語と財の実体について触れ，財貨を次の4種類に分類している[17]。第1は「もの言わぬ財」で，これには金銀その他の鋳貨が含まれる。第2は狭義の「商品」であり，それ自体が使用対象または販売対象となるものである。宝石，鉄，銅，鉛，木材等およびこれらを素材とするものがここに入る。第3は「不動産」であり，これはさらに「家屋類」と「農場類」とに分けられる。第4は「生存物」であり，もの言わぬ財に対するもの言う財のことである。これもさらに細分され，「奴隷」，「役用家畜」および「牧用家畜」に分けられている。

次に彼は「なぜもの言わぬ財が必要か」の見出しの下に，人間には膨大な数のさまざまな需要が存在し，それを満たすべく多数の職種が形成され，そこから相互依存関係が生じ，分業・協業関係が必要なことを説くのである。そして交換取引の成立可能性から交換手段・支払手段・価値測定手段としての貨幣の諸機能を論じ，一般的等価物としての金銀の適正，なかんずく金の優越性を主張する[18]。

商品学的論述においては，まず総論的な記述として，商品取引および商品管理における留意事項がおよそ3点に分けて述べられている。その第1は，商品ごとの標準価格の評価，価格変動と売買機会との関係および商品の品質の良し悪しならびに詐欺師が犯す偽造の識別の必要性についてである。第2は，加工技術などについては信頼しうる専門家の助力を受け，その忠告を聞き入れるべきことである。第3は，商品の損傷や変質を防ぐ方法ならびに各種の盗難を防止する方法についてである。この総論的記述を前提とし，次いで商品学の各論的記述がなされるのであるが，この部分は商品概念を最狭義に解釈しても，本書のほぼ3分の1を占める。このほかに生存物の記述や貨幣としての金銀の識別法に関する記述を加えれば，広義の商品に関する各論的記述は全体の4割にも及ぶ。取り扱い方としては，宝石や香料などの当時価値あるものとされていた貿易商品の説明に詳しく，繊維・食料部門のそれは相対的にやや少なく，金属にいたってはごくわずかな頁数しかあてられていない。また繊維の中に二次的製品や縫製加工品が含まれていたり，また食料部門に加工品が含まれていたりするなど，取引量の多い商品の場合，その加工の程度にかかわらず，最終消費財まで論及されている。個別商品の記述は，全般的に簡潔であるといえるが，その説明内容は商品ごとに量的にかなりの差がみられるとともに，重点の置き方にもそれぞれ著しい特色を有する。個別商品に関する標準的な記述スタイルは，香料や繊維商品の記述に見られるように，その品種や品質の良否およびその鑑定方法を記述するといったものである。食料類については，品質の良否・優劣に関する記述よりも，むしろその輸送・貯蔵における品

質管理の留意事項に力点が置かれている。商品の鑑定・検査方法では，人間の感覚器官による直接的な検査方法のみならず，簡便な試験による観察や初歩的ながら，かなり複雑な化学的試験方法，あるいは定量分析による手法なども紹介されている。さらに値付けの基準量に関する事例や真珠の記述に見られるように，商品の大きさと標準価格との幾何級数的関係などが述べられている[19]。

財貨入手の方式については，ディマシュキーはこれをその起源に基づいて，意識的な志向による場合と偶然的な遭遇による場合とに分けて述べている。前者には強権による方法，練達（技術）による方法および強権と練達との結合による方法の三つの方法があり，後者には遺産の相続や埋蔵物の発掘が含まれる。強権による方法には国家権力に基づく関税，租税，救貧税などのさまざまな取立てのみならず，犯罪として行なわれる略奪や窃盗も含まれている。練達による方法は商業，産業およびこれらの結合形態に分けられ，その具体的な事例が挙げられている。著者はまた商人について遍歴商人，蔵持商人および仕立商人の3類型を示すとともに，商取引についても期限付き前払取引，分割支払を含む信用取引および相互委託取引の三つの方式を挙げている[20]。

商人はいかに振舞うべきか，つまり商人の行動規準については，前述の商人の3類型に従って論及されている。ディマシュキーによれば，蔵持商人は市場の変動を予測しつつ，商品の原産地や輸送に関して詳細な情報を持たねばならない。また蔵持商人は買付けの仕方や価格変動にも留意すべきであり，さらには王侯の支配力などにも注意しなければならない。遍歴商人は何を商品として買付けるか，また希望した場所で引渡しが実現するとは限らないということ，さらに必要経費の計算にあたっては，商品の価格表や糧秣の見積り，それに各地の関税リストに基づくべきことなどに留意しなければならないのである。仕立商人は，商品の買付けにあたって，できる限り支払期限を延ばし，都合のよい支払条件と選択権において購入するよう努めなければならないのである[21]。

資産を保持するために必要な基本的事項については，五つの留意事項が指摘されている[22]。第1は，収入以上に支出してはならないということであり，第2に，支出は収入よりも少なくなければならず，残余は万一起こるかもしれない海損や営業上の損失などのために保留しておかねばならないのである。第3は，対処できないような，または保持できないような物事にまで手を広げないよう注意することである。第4は売れ足の遅いものには金を出さない方が良いということである。第5は商品を売るときは素早く，不動産を売るときは時間をかけてせよということである。

以上，ディマシュキーの『商業の美』について，その概要を，とりわけ経済理論的・商品学的・商業学的部分を中心に明らかにしてきたのであるが，最後に同書の経営経済学史的意義について若干触れておこう。本書の内容は，既述のように大別して経済理論的・商品学的・商業学的・教訓的部分の四つの部分から成るものであるが，これらの一部には交錯がみられ，また関連すべき部分が分割されているなど，必ずしも順序だてた配列がなされているわけではない。この意味において本書が実務上の経験的知識の集成にすぎないと評されたのも止むを得ないことかもしれない。

しかし原著が二つの写本から更改されたものであるということを考慮に入れるならば[23]，本書は単なる断片的な記述ではなく，それを超えた経営経済に関する最古の総合的著作と位置づけられる。著者は市場価格が需要と供給の産物であり，それがさらにまた諸種の要素に依存していることを認識していたし，分業の意義を認め，交換手段・支払手段・価値測定手段としての貨幣の諸機能や一般的等価物としての金銀の適正を理解していた。さらに著者は商品学を展開する際，価格および品質を総論的事項として取り上げるとともに，各論として個別商品を取り上げることにより，その体系化を図り，また商人を類型化し，その行動規準を明らかにしている。加えて，資産の保持に関しても，今日の経営戦略や販売戦略において重要視されている事項を指摘している。これらの特徴から本書を総括するならば，同書はペリの書物に照応するものといえよう。しかし経済的考察方法につ

いていえば，本書はむしろペリの水準を凌駕していると考えられる。

III　イタリアの商業書

1　商業誌の特質

商業誌（Kommerzienkunde）は既述のように広義の商業学に属するが，狭義の商業学との関係ではその前段階に位置づけられる。商業誌の「誌」とは事実を書きしるしたものを意味する。故に商業誌の内容は，商人にとって知る価値のある事柄や状況の収集，記述ならびに場合によっては分類の域を越えるものではない。この時代の商業文献は，記録として残されている知識という点で文献史的意義を有するが，その大半は一般の人々には知られていない。当時それらは営業上の秘密とされ，入念に保管されていたため，公表されることはなかった。つまりそれらは制度的商業の内部慣行に関する手引書としての性格をもつにすぎなかったのである[24]。

文書が公表され，あるいは他の方法によって知られている限り，それらは多かれ少なかれ基本的な事項つまり，ほとんどが明瞭な日常的経験に基づくものを内容としていた。従ってその中には，しばしば古い文献から批判もなしに伝承されたものや，時として倫理規範的な要求または迷信に由来する主張を伴う極めて疑わしい記述も含まれていた。それとともに通常重要なものとされたのは，商業経営や商取引にとって有用な情報や教えである。具体的には，簿記および原価計算，商業算術および利息計算表，貨幣学，度量衡学および商品学，市場開催および市場慣習，保管および輸送費用，商業通信，契約制度ならびに法律関係および支払取引に関する申立といった諸領域が重要なものとされた。これらを今日の経営経済学の領域に置き換えるならば，その大部分は会計制度や経済数学，営業技術といった基礎科目に属するものである[25]。

商業誌の時代に属する多数の著者のうち，ここで主として取り上げるのは3人のイタリア人である。当時のイタリアはルネサンスの起点であり，

学問の新たな飛躍の起点となっていたばかりでなく，欧州において最も経済的に進歩した国であった。この商業共和国は地中海を越え，その沿岸各地に進出し，またアルプス山脈を越えて北方諸国に進出することにより，商業関係を拡大させた。しかもその政治的権力や才知には，商人精神や冒険心，それに経済的能力や熟練が密接に結び付いていたのである。これらの事情を知る限り，当時イタリア人が他の諸国民の，従ってドイツ国民にとっても商業教師であったことは明らかである。今日の経済用語に含まれるイタリアを起源とする多数の商業概念はこのことをよく物語っている[26]。

2　ピサのレオナルド

個別経済学の発展再開において，決定的指導権を執ったのはピサのレオナルド（Leonardo Fibonacci Pisano）[27]である。氏はイタリアの商業都市ピサに商人の子として生まれ，幼年のときに算盤を学び，その後エジプトやシリア，ギリシャ，シシリーを遍歴し，この間に種々の計算法を習得した。ピサに帰った後1202年，氏はラテン語で『算盤の書』（Liber abaci）という大著を公にした。この書物は次の15章から成るが[28]，その内容は表題とやや異なり，インドおよびアラビアの数学，記数法，計算法などを説いている。

1．インド，アラビア数字の読み方と書き方，2．整数の乗法，3．整数の加法，4．整数の減法，5．整数の除法，6．整数と分数との乗法，7．分数と他の計算，8．三数法，商品の相場，9．両替，10．合資算，11．混合法，12．問題解法，13．仮定法，14．平方根と立方根，15．幾何学（測量を含む）と代数学。

ここに掲げた内容から明らかなように，本書は算盤計算を論じたものではない。にもかかわらず『算盤の書』と題するのは，当時「算盤」が計算の表徴であったからである。同書の開巻第1頁にはこう述べられている。「インドの九つの数字は，9，8，7，6，5，4，3，2，1である。これら九つの数字とアラビアではsifrと呼ばれる記号0とをもって，どんな

数でも自由に表すことができる[29]」と。

商業学および商業実践における氏の意義は，この『算盤の書』によって，元来はインドに誕生し，東洋の学者や商人によって数世紀前に伝えられたアラビア数字による計算方法を西洋に知らしめたことにある。従来用いられていたローマ数字に対するその長所は，ゼロを伴うインド式位取り記数法にあるが，これによって計算が一目瞭然となり，より迅速に処理されるようになった。この実例は同書の商業計算の方法という箇所に述べられている。それ故に数学書として理解されているレオナルドの『算盤の書』は，商業算術の最初の近代的教本と見なしうる[30]。カジョリはいう，「レオナルドの著述は数世紀間，数学知識の倉庫であった。多くの著者は，これから算術や代数の材料を引きぬいたのである[31]」と。他方レッフェルホルツはその著書『経営経済と経営経済学の歴史』において，レオナルドの『算盤の書』の意義を特に次の点に認めている[32]。すなわち，同書が非常に多数の正確な計算を例示し，それによって資本主義的企業に特徴的な計算性向の出現を促進し，これを通じて中世的な，しばしば感情的になされた思考に代えて，数量知識とりわけ原価に基づく合理的意思決定の出現を招来したこと，これである。さらにゾンバルトは，数学的および商業学的境界を遥かに越えた『算盤の書』の影響に対してこう語っている。「商人精神から自ら不朽の書を著したピサのレオナルドによって，正確な計算の基礎が与えられた。経済的合理主義の生成が位取り法の発展と結び付いていること，および早期資本主義経済の発展の遅れが記数法の欠如に関連していることは明らかである。1202年が世界史における転換期を意味するのは確かである。そして近代資本主義の出生年を決める際，私は1202年を出生年とすることをためらわないであろう[33]」と。つまり『算盤の書』は正確な計算の基礎を与えることにより，経済的合理主義の生成を促進したのであり，近代資本主義の出発点に立つ著書と考えられる。

レオナルドの名声は同書の刊行とともに次第に高まり，イタリアを越え，外国にまで響いた。シシリー王国に最初の近代的国家を築き，ルネサンス

の先覚者の一人と見なされているホーエンシュタウフェン家のローマ・ドイツ皇帝フリードリッヒ2世は，氏との出会いを求め，また文通を求めた。レオナルドがこの学問の偉大な保護者と会見したとき，有名な科学上の試合が行なわれた。その際，帝室の公証人であったパレルモのジョヴァンニは数学の問題を多数提出したが，レオナルドはそれらに対して即座に解答を与えたといわれている[34]。

氏の優れた業績は主に代数学上に残されているが，このほか氏は1220年に『幾何学の実用』という書物を著している。この書には氏の問題解決の巧妙さと幾何学的厳密性とが十分発揮されている。アラビアの写本あるいはイタリア人による訳本から，彼がユークリッドその他のギリシャの名著に親しんでいたことが窺われる[35]。

レオナルドはこのようにキリスト教国における数学復興の最初の人物であった。氏によって示された新しい計算方法は，極めてゆっくりであったがイタリア商人の間に普及していった。同書の刊行から2世紀後も，依然としてそれが一般的有効性を獲得しえなかったことがこれを物語っている[36]。レオナルドの代数が全くの「言葉代数」によるものであって，代数的記号が少しも採用されていなかったこともその一因であろう[37]。

しかしそれよりも重要な要因は，1299年にフィレンツェでインド数字の使用を禁止する布告が発せられたことである。商人たちは簿記をつける際，インド数字で記入することを禁止され，ローマ数字かまたは言葉のいずれかで，これを書くよう命じられたのである。当時，商人の間ではインド数字が用いられていたが，その字体はまだ一定していなかった。そのためインド数字の変体から誤解や詐欺などの不正行為が発生する恐れがあった。布告が出されたのはこのような事情によるものである[38]。ともあれ，こうした禁止令が出されたにもかかわらず，インド数字は1400年頃までには全ヨーロッパに知れわたり，天文学などに使用され，15世紀の中葉以降にはイタリア以外の商人達の間でもインド数字を使用するに至ったのである。

3　ルカ・パチョーリ

商業誌の発展にとって重要な第2番目の著者は，簿記学に関する功績によって著名な聖フランシスコ教団の僧侶ルカ・パチョーリ(Luca Pacioli)[39]である。氏は1445年頃，イタリアのトスカーナ地方にあるサン・セポルクロに生まれ，その町の修道僧から一般教育と宗教の教えを受けた。20歳のとき，氏はヴェネツィアに赴き，同地の富裕な商家に入り，その3人の令息たちの家庭教師となったが，それと同時にその地の著名な数学の教師ドメニコ・ブラガデイノ氏の門をたたき，教え子たちとともに数学の公開講義を熱心に聴講した。1470年，パチョーリ26歳のとき，氏は数学に関する最初の著述を公にし，これを商家の3人の令息たちに贈り，ローマへ赴いた[40]。この間，氏は商家のために商品を運び，船旅をすることを通じて，商業実務に精通するようになっていた[41]。

1475年，教師としての昇進を願う多くの若者と同様に，パチョーリはフランシスコ修道会に入会し，修道僧となり，イタリア各地の宮廷や著名な大学を歴訪することになった。同年氏は，ペルジア大学で数学教授となり，学生のために講義用として数学に関する小論文をまとめた。その後ツアラに赴き，同地で数学に関する3冊目の著書を公にした。一箇所に留まることのなかった氏は再びペルジアに帰り，数学教授の椅子につくが，同地に留まるも2年，招かれて再びローマに赴いた。かくて氏はナポリやミラノ，フローレンス，ピサ，ボローニヤなどの各地に赴き，数学の講義を行なった。氏の最終講義は1514年，ローマ法王レオ10世（Leo X）の招聘によりローマ大学で行なわれた[42]。

この間1494年，50歳を迎えようとしていた氏はヴェネツィアで『算術，幾何，比および比例総覧』(Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita) を公刊し，これをウルビノ公に奉献した。世界最初の複式簿記の書として名高い同書は，当時の算術，代数および三角法に関する一切の知識を含んでおり，レオナルドの『算盤の書』以後に現れた，最初の広汎な著述であった[43]。また氏は1496年から99年にかけて，ミラノのロ

ドビコ・マリア・スフォルザァ公爵家に招聘され，同家に滞在し，ユークリッド幾何学の講義を行なった。このとき氏はそこで多数の著名な学者や芸術家と交わったが，なかんずく画家のレオナルド・ダ・ヴィンチとの間には深い友情が結ばれた[44]。ダ・ヴィンチはパチョーリの『神聖比例論』(1497年）のために挿絵を作成し，パチョーリはこれに対しダ・ヴィンチの創作していた巨大なスフォルザァ公爵像に必要な青銅の量を計算したと伝えられている[45]。

パチョーリの著作のうち商業学にとって最も重要なものは，前述の1494年にヴェネツィアで公刊された著書『算術，幾何，比および比例総覧』(『スムマ』と略称する）である。300頁余りの本書は2部から成り，次の五つの論題に及んでいる。すなわち，1．代数と算術，2．商取引でのその使用法，3．簿記，4．貨幣と両替，5．純粋幾何学と応用幾何学である[46]。第1部（224頁にわたる）では主に算術および代数を取り扱い，第2部（76頁にわたる）では主に幾何を説述している。第1部終わりの第9編，論説第11には「計算および記録に関する詳説」(Particularis de Computis et Scripturis)と題された世界最古の複式簿記が収録されている。このいわゆる「簿記論」は36章から成るが，これらを事項別に整理すると次の12項目に集約される[47]。すなわち，(1)必要事項と一般事項，(2)財産目録，(3)日記帳，(4)仕訳帳，(5)元帳，(6)重要な取引の記録方法，(7)繰越方法，(8)計算書の作成方法，(9)誤謬記入の訂正，(10)帳簿の締切，(11)書類について，(12)総括，である。

パチョーリは「簿記論」の第1章において，商業経営を成功させるのに必要な三つの事項を述べている[48]。すなわち，(1)現金または何らかの財産，(2)善良な計算係と熟練した簿記係，(3)各取引を秩序正しく整理しておくこと，これである。商業を営むには，現金その他の財産が不可欠であることは言うまでもないが，パチョーリは，無財産でただ信用のみをもって開業した多くの人々が大きな事業を営み，信用を忠実に守ることによって，より大きな富裕を手に入れていることを指摘し，真実の商人であることが商

業を営む上でより重要であることを力説している。

次いでパチョーリは第2章で，すべての商人の目的は合法的に相当の利益を得ることであるとし，それ故に商人は常にその営業を神の御名によって始めなければならないと述べ，商人が常に神の御名を心に留めながら，すべての文書のはじめに神の御名を掲げるべきことを主張する。そして商人はまず自己の有するすべての資産・負債を包含する財産目録を作成し，その記載順序は比較的に高価で紛失し易いものから始め，これを同一日に作成し終わらなければならないと主張する[49]。

財産目録を作成したならば，次いで商人は日記帳，仕訳帳および元帳の3種の帳簿を用意する必要がある。パチョーリによれば，日記帳には日々刻々発生するすべての取引を詳細かつ如実に記入し，日を追ってこれらの取引を発生した順序に従って日記帳から仕訳帳に転記するのである[50]。当時，イタリアの諸都市はそれぞれ独自の貨幣を発行していたので，日記帳には異なる貨幣単位で取引が記載された。しかし日記帳から仕訳帳に転記する際には，日記帳における各記入を一定の標準貨幣に換算する手続きを必要とし，その手続きは極めて困難かつ複雑なものであった[51]。それ故にパチョーリは，その正否を検証するために，仕訳帳に記入されたすべての項目が後日，主人によって照合されるべきことを勧めるのである。

パチョーリは第10章から第12章にかけて仕訳帳への記入方法を述べている[52]。すなわちこの帳簿には日記帳の場合と同様にまず記号と頁数をつけ，各頁の最初には年次と日付を記載し，しかる後に財産目録にあるすべての項目を順次この帳簿に転記するのである。仕訳帳における各記入の最初には常に「借方」という言葉を書き，その項目を記載する。次いで借方と貸方とを区別する2本の小さな平行斜線（//）を記入し，続いて「貸方」という言葉を書き，その項目を記載する。そして最後に日記帳に記載されている文章を要約する説明文を記入するのである。この摘要欄には時価，数量，目方等を詳細に記載するとともに，各項目に対する貨幣の種類を掲げる。ただし金額欄にはこれらの貨幣を1種類のものに換算して記載する。パ

チョーリはさらに第12章において，現金と資本金を区別した仕訳帳の記入方法を示し，資本金は常に仕訳帳の貸方に，現金は借方に記入すべきことを述べている。

第13章から第16章は元帳に関する記入方法を論じている[53]。元帳にはアルファベット順の索引ないし目次をつけ，この順序に従ってすべての勘定口座を設けるとともに，仕訳帳および日記帳につけた記号と同じ記号を記載する。そして借方項目を左頁に，貸方項目を右頁に設け，頁数および年次を記入した後に，その第１頁に現金を借方項目として記載する。また元帳には貨幣の種類と同数の金額欄を設け，かつその左側に元帳の頁数を記載する欄を設ける。借方項目においては，これと対応する貸方項目の元帳頁数を記載し，反対に貸方項目においては，これと対応する借方項目の元帳頁数を掲げる。従って貸方記入の伴わない借方記入は存在しないし，反対に同額の借方記入のない貸方記入もありえない。元帳の借方金額と貸方金額は同額でなければならないのである。かくて仕訳帳から元帳への転記が済んだときは，仕訳帳の記入欄を横切って２本の斜線を引くのである。

以上のようにパチョーリは帳簿と勘定の基本的な枠組みを明らかにした後，第17章から第26章において，日常遭遇する専門的な会計問題や重要な取引の記録方法について論じている[54]。すなわち第17章では，市貸付所などの官庁との取引を処理する方法が説明されており，第18章では取引所との取引についてその記録方法が解説されている。第19章では振替銀行を通じての為替手形による支払の記入方法が取り扱われ，第20章では商業経営において頻繁に起こる，特殊な，かつ一般によく知られている交換取引の記録方法が記述されている。第21章では組合と称する一般に知られた勘定について，その処理方法や記帳方法が論じられ，第22章では家事費・営業費・給料などの各種の費用項目に関して，その順序や記帳方法が述べられている。第23章では支店の会計処理が説明され，第24章では仕訳帳および元帳における銀行勘定の記入方法や為替手形の取り扱い方が述べられている。そして第25章では，元帳に設けることが慣習となっていたり，別個の帳簿

に設けられたりする，収入および支出と称されている特別勘定が論じられ，第26章では商人自身が行なう，または他人に行なわせる出張販売について，その勘定の記入方法が述べられている。

第27章から第34章においては，主に会計帳簿の締切と決算過程が取り扱われている[55]。第27章で論じられている損益勘定は，パチョーリの元帳における諸勘定の中で最も特徴のある箇所である。この勘定は，今日の集合損益勘定のように，すべての商品売買の成果に関する諸項目を集合・記入するのではなくて，商品または冒険商売ごとに別々に設けられ，いわゆる口別損益計算を表した。パチョーリの損益勘定は，各冒険商売が終了したときに記入され，営業年度ごとには記入されなかった。つまり異なる商売の残高は，日記帳から直接元帳に記入され，仕訳帳に記入されることはなかったのである。従って商品売買勘定が欠け，また商品棚卸も欠けていたのである。続いてパチョーリは，第28章で元帳勘定の繰越方法について論じているが，その締切方法は極めて特異である。今日，元帳は年度末に一斉に締切るのが通例であるが，パチョーリの「簿記論」においては，旧元帳勘定の記入が一杯になり，もはや記入の余白がないという場合に，新規に作成した元帳に繰越す際これを行なうのであって，繰越は単に元帳勘定の借方および貸方においてのみこれを行ない，仕訳帳にはこれを記入しないのである。パチョーリの「簿記論」は概ね以上のような事項から構成されている。

ところで周知のように，本書はしばしば複式簿記に関する記述として世界で最初に出版された書物とみなされている。しかし氏をもってその創始者と理解するのは誤りであろう。このことはまず氏の「簿記論」の緒論における彼自身が述べた言葉から明らかである。いわく「本論説において以下章を追って記帳方法を説述する。……（中略）……そして，われわれは，ヴェニスで採用されている方法に拠ったものであるが，この方法はあらゆる方法のうち，たしかに推奨に値する[56]」（第１章）と。また次の文献からも，パチョーリの同書成立以前に既に複式簿記が存在していたと考えられ

る。すなわち1573年にヴェネツィアで公刊されたベネデット・コトルリイ（Benedetto Cotrugli）の著書『商業および完全な商人』（Della mercatura et del mercante perfetto）が，その公刊に先立つこと約115年前に原稿の形式で存在していたのである。氏は同書の最後にそれが1458年に完成したと記しているが，この日付を信頼しうるものとすれば，コトルリイの著書はパチョーリの「簿記論」が世に出る約40年前に既に完成していたことになる[57]。そしてヴェネツィアでは夙に複式簿記が採用されていて，これが同地から各地に「ヴェネツィア式簿記法」として移入紹介されていったことなどを考慮するならば，複式簿記の思考がパチョーリの独創によるものでないことは明らかである。むしろ複式簿記の思想は，13世紀ないし15世紀にイタリアの営利企業の発達によって徐々に形成されたものであると解すべきであろう[58]。従って複式簿記に関する新たな史料が発見されない限り，その真実の創始者を特定することは極めて困難である。

ともあれこの複式簿記の体系が後のイタリアの簿記文献に長期に亙って影響を及ぼしただけでなく，ヨーロッパ全土を通じて会計制度に大きな刺激を与えたことは明らかであり，その形式的および内容的に優れた複式簿記に関する論説を出版した功績はもちろんパチョーリに帰せられる。『スムマ』が高く評価されているのは，印刷本が希少であり，その制作が高価な時代に同書が公刊されたことによるものである。会計的知識は主に徒弟制度や使用人の転職によって伝えられていたが，同書の出版により，その知識が実務一般に広く普及したことは明白である。そして『スムマ』がその初版刊行後100年の間に５ヶ国語に翻訳されたことを思念するならば[59]，同書がいかに大きな影響力を与えた書物であるかが分かる。

4　G.D. ペリ

商業誌の発展に寄与した第３のイタリア人としてはジェノヴァの商人ペリ（Giovanni Domenico Peri）を挙げることができる。氏の著作は商業誌の時代に属するが，次の重商主義商業学の時代への移行は既に氏の著作活

動とともに始まっているとみてよいであろう。ペリの学歴および経歴については，氏の著書から推定しうることのほか何ら知りえないのであるが，同書によれば少なくとも氏が哲学や神学，法学を学んだということ，つまり職業上重要な一般知識を身につけていたということ，そして長期に亙る営業実務により，商人としての基本的な社会知識を有していたことも推察されうる。ペリの同書における本来の目的は，当時のエリート商人間で一般に行なわれていた慣習を踏襲すること，すなわち商人としての経験の蓄積を息子たちに自筆で伝えることだったのである[60]。

すべての商事に関してその秘密を固守しようとする当時の傾向と裏腹に，ペリが自己の草稿を一般の人々に利用できるよう決意したことは，氏に先見の明があったことを裏書きするものであり，また氏の寛大さを物語るものでもある。氏の手記は1638年，ジェノヴァで『商業論』(Il Negotiante) というタイトルで初めて公刊されたが，そもそも同書はペゴロッチやウッザノ（Uzzano, A. da)，コトルリイ等の文献を参照し，これに氏の多年に亙る商業経験を踏まえ，息子たちへの遺産として著されたものであったため，後に公刊されるに及んでさらに加筆されたと伝えられている。数版を重ねた後，1682年にヴェネツィアで出版された同書の増補版ではかなりの普及をみた[61]。そこでこの約700ページに及ぶ同書の内容を以下に概説する。

本書は次の4部から構成されている[62]。第1部では商人の起源，アラビア数字による計算，ラテン語，文書実務，簿記，会計係および文書係の業務ならびに業務規程，会社設立や文書交換の事例，適正契約の締結や手形取引に関する事例が取り扱われている。第2部では商人に必要な資質，支払流通，商業鑑定および仲裁裁定，利子収入の可能性および手形業務が取り上げられている。ペリはここで同時に多数の商取引所の相場を取り上げ，その状況や商工業について記述している。第3部では誤謬の究明方法を含む複式簿記の技術および体系が詳説されるとともに利子や金融取引，運送業務に関する諸章を含んでいる。ここでは特に当時の支払流通のための手

形の意義が明らかにされている。第4部では重要な特殊問題をアトランダムに取り上げている。すなわち商業の必要性と有用性，商人の特質および知識，当座勘定，共同，手形支払，手形引受，手形保証，複利計算，資本参加，代理権，保険，譲渡，貸付，受領書，寄託，手形拒絶証書その他である。

ペリの『商業論』はその書名が示唆するように，専ら商人を対象に書かれたものであるが，前述の概要からその内容は単に若干の営業技術だけを教示したものでないことが分かる。そしてペリの著書が氏に影響を及ぼしたレオナルドやパチョーリの論文よりもさらに先の目標を追求していることに気づくであろう[63]。氏は基礎的な商業実践のほかに哲学や神学，法学を学んでいるが，この詳論では実証された自己の経験に厳格に依拠し，その素材を教育的観点から配列している。それ故にペリは商人の目的や有用性から出発し，商業の基本的活動を論じ，経済的経営の組織的構造やその過程を明らかにし，さらにもう一度最初に述べた基本的活動のさまざまな職場への応用について説明するのである。この絶妙な序論に次いで第2部では概念化が行われる。ペリはここで商人それ自体やその法的関係ならびに金融取引および手形取引による利子収入の可能性について問う。そしてこれらの理論に次いで第3部では，簿記によるすべての成果管理を含む実践的適用を試みる。最後の第4部は，ペリがその人生行路において収集した特殊な体験に由来するさまざまな詩華集から成る[64]。このようにペリは商業算術や複式簿記の方法にとどまらず，商人に対してあらゆる状況において経営管理に有用な助言を与えることが可能な商業の経営的および市場的行動に関する記述を試みたのである。

ところで氏のこの詳論には，経済実践の情報需要に役立つとともに学問的に価値ある多数の商業誌的データ，例えば経済地理的な指摘や商法的な教訓，貨幣・度量衡学に関する指示などが収録されている。それ故に1682年のヴェネツィア版では増補され，約700頁に及ぶ大著となった。ライテラーはこのような同書をもって商業教科書と商人便覧の組み合わせとして

特徴づけ，その組み合わせによる方法論的短所を次のように指摘している。すなわち「大量の事実の記述は叙述の完結性を破壊する[65]」と。

ペリの著作には，その精神的基礎において統一的な方針が見当たらない。同書は一方でスコラ哲学によって厳密に規定されている要素を含んでいる。例えば価格論では，アントニウス・フォン・フローレンス（Antonius von Florenz）による適正価格の等級を継承しているのである[66]。他方では既にゾムバルトがペリの発表した商事会社の契約図式に関連して確認したように[67]，夙に前期資本主義的思想の影響が認められるのである。また同書の実質的構成においても一貫した主題が存在しないことに気づくのである。すなわち同書は4部に分けられているが，そこでは厳密に相互に区別した個々の知識領域について，完成された記述がなされている，というよりはむしろ，それぞれ著しく異なった領域が無秩序に配列されているのである[68]。それ故にペリには当然ながら次のようにウェーバーの批判が向けられることとなる。すなわち同書には体系もなければ指導的思想も存在しないと[69]。しかも本書には問屋営業や小売商業に関する説明が欠漏しているのである。それは氏がこれらの分野について経験してこなかったことにもよるが，当時は卸売商人のみが商人として見られた事情による方が大きいと考えられる[70]。

商業誌の時代の経営経済文献，特にペリに関する過小評価は，門外漢の筆に由来するものである。異分野の事実素材に関する研究は当時かなり困難であった。さまざまな経営規模があり，当時は社会情勢も不安定であったし，さらにとりわけ一般経済経営学といったものが存在しなかったため，研究者は特殊な要求に応えなければならなかったのである。このような状況下では，当時の科学的認識価値，特に原素材に基づく研究や著者の科学的研究能力をもってしても優れた著作は残せなかったであろう。それ故に理論的認識のための原素材を記述したり，自己の理論的研究によって確実になった特殊な経験を書き留めておいたりすることは，それが後の他の著者による理論的研究に役立つ限り，正しかったのである[71]。

ともかくペリの『商業論』は，会計制度の他に商業経営論や商取引論の基礎，そして当時の基礎的商業知識を包括的に提供した最初の書物である。たとえ同書が商業に関するあらゆる事柄を極めて雑然と並べていようとも，商業学の更なる発展に必要な基礎はペリの本書の中に初めて準備されたのである。恐らく本書はイタリアのルネサンスに負う重要な商業誌的出版物の最後を飾るものであろうが，しかし同時に重商主義時代の先駆者としてだけであっても，その頃から相次いで出版された一連の包括的な商業学的研究に関連して挙げられなければならない最初の著書でもある[72]。とりわけサヴァリーにとって，また氏の主著『完全なる商人』にとって，ペリの『商業論』は最も重要な文献の一つであったに相違ない[73]。

イタリアのルネサンス期には，本章で取り上げた3人の著者以外にも商業学の発展に寄与した人，例えばペゴロッチ（Francesco Balducci Pegolotti）やマンツォーニ（Domenico Manzoni），コトルリイ（Benedetto Cotrugli）がいる。しかし彼らは商業学の発展には寄与しているが，重要性の観点に立って評価すると，レオナルドやパチョーリよりもやや劣るといえよう。

ところでドイツでも，この時期には商業学的著書が多数著された。しかしシュヴァルツ（Matheus Schwarz）やグラマテウス（Henricus Grammateus），メーダー（Lorenz Meder）といった著者たちは，本稿で取り上げた3人のイタリア人が与えたほどの影響を斯学には及ぼさなかった。イタリアに匹敵する学問の奨励者がドイツにはまだ登場していなかったのである。蓋し当時は南欧諸国，とりわけイタリアの航海・商業共和国の方がアルプス北部に位置するドイツなどよりもはるかに経済的に優位に立っていたからである[74]。

商業誌の発達は，このように本質的にイタリア人の著作に負うところが大きい。ただしレオナルドの『算盤の書』（1202年）からパチョーリの『スムマ』（1494年）に至るまでに約3世紀の隔たりがあり，さらに後者からペリの『商業論』（1638年）に至るまでに約150年の隔たりがあるということ

を考慮に入れるならば，商業算術から簿記の時代を経て，ペリすらもそれを超えることのできなかった取引技術の時代に至るまでの斯学の進歩がいかに緩慢であったかが分かる。蓋し斯学の先駆者たちは，若干の伝承された知識と自己の経験，そして恵まれている場合には当時の知識人を頼りに研究するしか他に方法がなかったからである。このような事情を踏まえるならば，われわれは当時の研究者たちが遺した業績に対して今日与えられている以上の評価を与えなければならないであろう。

結びにかえて

ディマシュキーの『商業の美』やイタリア人の3人の各商業書において取り扱われていた商業知識は，今日なお大学の商学部や経営学部などにおいて教育科目の一部を構成するが，それらは固有の科学的研究に先行する基礎科目の性格を有するものである。従ってそれらの商業知識は，実践的な商人のみならず，理論的な経営学者にとっても必要な知識ではある。しかし後者にとってそれらは科学的研究の対象にならないことは言うまでもない。

商業誌の時代の科学的進歩は，商業学のその後の発展からみれば，その第一歩を踏み出した段階にすぎない。当時，商業に関する資料の収集，記述および分類は，わずかな進歩しかみられなかったからである。商業誌が形成された期間が極めて長期に亙ったため，斯学には二つの異質な基本的観念が並存する。すなわち一方に中世スコラ哲学的基本観念があり，他方には近世資本主義的基本観念が存在するのである。商業誌は経験から得た認識を基本に，さらに古代から無批判的に伝承した商業に関する諸説を包摂し，もってその下でしばしば偏見に基づく見解を繰り返し唱えていたのである。しかしこのことは，科学的研究が合理的かつ体系的方法を再考するようになったルネサンス期に至って初めて認識されたのである[75]。ともあれ，そうした下準備がなければ，17世紀に生成した重商主義商業学は形

成されえなかったであろう。それ故に13世紀から16世紀にかけて研究された商業誌は，若干の条件が伴うにせよ，近代経営経済学の先行科学として少なからぬ意義を有するといえよう。

[注]

1 Weber, E.: Literaturgeschichte der Handelsbetriebslehre, Tübingen 1914, S. 7.
2 Seyffert, R.: Über Begriff, Aufgaben und Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre, 6. Aufl., Stuttgart 1971, S. 30.
3 Ebenda, S. 35.
4 Leitherer, E.: Geschichte der handels-und absatzwirtschaftlichen Literatur, Köln und Opladen 1961, S. 13ff.
5 Sundhoff, E.: Dreihundert Jahre Handelswissenschaft, Göttingen 1979, S. 16.
6 Bellinger, B.: Geschichte der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1967, S. 10f.
7 Sundhoff, a. a. O., S. 17.
8 この著者名の表記法については風巻義孝『商品学の誕生』（東洋経済新報社，1980年）6－7頁を参照されたい。本稿では，書名などに関連して特にアリー・アッ・ディマシュキーと呼ぶ以外は略称のディマシュキーという表現を用いる。
9 書名は次のドイツ語訳に基づくものである。Das Buch des Hinweises auf die Schönheiten des Handels und die Kenntnis der guten und schlechten Waren und die Fälschungen der Betrüger an ihnen (Ritter, H.: Ein arabisches Handbuch der Handelswissenschaften, in: Der Islam, Bd.VII, Straßburg 1917, S. 2.)
10 ディマシュキーの『商業の美』を取り扱っている主な文献としては以下のものが挙げられる。
Ritter, H.: Ein arabisches Handbuch der Handelswissenschaften, in: Der Islam, Bd.VII, Straßburg 1917, S. 1-91.
Penndorf, B.: Die geschichtliche Entwicklung der Handelswissenschaften bis zum Ende des 19. Jahrhunderts, in: Zur Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre, Festgabe zum siebzigsten Geburtstage von Hofrat Professor Robert Stern, Berlin/Leipzig/Wien 1925, S. 8.
Leitherer, E.: Geschichte der handels- und absatzwirtschaftlichen Literatur, Köln und Opladen 1961, S. 44-46.
Wiedemann, E.: Mineralogisches aus einer arabischen Handels-und Warenlehre, in: Beiträge zur Geschichte der Naturwissenschaften XXX, 1912, S. 229-35; Aus der arabischen Handels-und Warenlehre von Abu'l Faḍl Ga'far Ibn

'Alî al Dimaschqî, in: ebd. XXXII, 1913 S.35-54; Nachdruck, Aufsätze zur arabischen Wissenschaftsgeschichte, 2 Bde., Hildesheim/New York 1970, Bd. I, S. 853-59, Bd. II, S. 5-24.
増地庸治郎『経営経済学』（『経済学全集』第36巻）改造社，1929年，9頁。
佐々木吉郎『新版経営経済学の成立』中央書房，1955年，66-67頁。
風巻義孝『商品学の誕生』東洋経済新報社，1980年，1-72頁。

11 Sundhoff, a. a. O., S. 13-19.

12 Vgl. Klein-Blenkers, F.: Courcelle-Seneuil, Emminghaus und Lindwurm als Vorläufer der neuen Betriebswirtschaftslehre in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts, in: Aufsätze zur Geschichte der Betriebswirtschaftslehre, Köln 1994, S. 114.

13 Penndorf, a. a. O., S. 8.

14 風巻義孝，前掲書，9-11頁。Vgl. Ritter, a. a. O.; Wiedemann, E.: Aufsätze zur arabischen Wissenschaftsgeschichte, 2 Bde., Hildesheim/New York 1970.

15 Penndorf, a. a. O., S. 8; Leitherer, a. a. O., S. 45.

16 風巻義孝，前掲書，11頁参照。

17 同上書，13頁参照。

18 同上書，14-17頁参照。

19 同上書，17-27頁参照。

20 同上書，38-41頁参照。

21 同上書，45-50頁参照。

22 同上書，52-54頁参照。

23 同上書，11-12頁参照。

24 Sundhoff, a. a. O., S. 19.

25 Ebenda, S. 19.

26 Ebenda, S. 19f.

27 レオナルド・フィボナッチ（およそ1170—1250年頃）は，ピサのレオナルドとも，またフィボナッチとも呼ばれる。レオナルドの時代，ピサはヴェネツィア，ジェノヴァと相並んでイタリア商業の大中心地であった。父がアフリカの貿易の中心地ブージーにおいて代理業者であった関係から，氏はその地のイスラム教学校に入り，そこで初めてインド記数法に接したといわれる（小倉金之助補訳『復刻版カジョリ初等数学史』共立出版，2001年，165頁参照）。

28 同上書，166頁参照。

29 同上書，166頁。レオナルドの引用文中，数字の並び方が大きいものから小さいものへと逆に並んでいるのは，アラビア人が文字を書くときに右から左へ進むことに由来する。アラビア語の sifr (sifra＝空) は，ラテン語の zephirum に転じ，さらに英語の cipher（ゼロ）に転じた（同上書，166頁参照）。

30 Sundhoff, a. a. O., S. 20.
31 小倉補訳，前掲書，167頁。
32 Löffelholz, J.: Geschichte der Betriebswirtschaft und der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1935, S. 121f.
33 Sombart, W.: Der moderne Kapitalismus, 1. Aufl., Leipzig 1902, 1. Bd, S. 392.
34 小倉補訳，前掲書，167頁参照。
35 同上書，184頁参照。
36 Sundhoff, a. a. O., S. 21.
37 小倉補訳，前掲書，167頁参照。言葉代数とは，符号を少しも用いないで，すべての事柄を言葉で書く方式の代数をいう（同上書，150頁参照）。
38 同上書，168-169頁参照。
39 ルカ・パチョーリ（およそ1445—1514年）は，出生地のボルゴ・サン・セポルクロ（Borgo San Sepolcro）にちなんで，自身を Lucas de Burgo Sancti Sepulchri とも名乗っていた（Sundhoff, a. a. O., S. 21）。氏の名前の呼び方にはこのほかバルトロメオ（家）の息子ルカとか，ボルゴ・サン・セポルクロ（出身）のルカとか，フラ・ルカ・パチョーリなどがあり，一定していない（片岡義雄・片岡泰彦訳『ウルフ会計史』法政大学出版局，1977年，126頁参照）。
40 片岡義雄『増訂パチョーリ「簿記論」の研究』森山書店，1968年，9-11頁。
41 津田正晃・加藤順介訳『チャットフィールド会計思想史』文眞堂，1979年，55頁。R. Emmett Taylor, "Luca Pacioli," in A.C. Littleton and B.S. Yamey, eds., Studies in the History of Accounting (Homewood, Ill.: Richard D. Irwin, 1956), p. 176.
42 片岡義雄，前掲書，11-14頁参照。
43 小倉補訳，前掲書，196頁参照。
44 片岡義雄，前掲書，12-13頁参照。
45 津田・加藤訳，前掲書，56頁参照。
46 同上書，57頁参照。
47 片岡義雄，前掲書，2-5頁参照。ただし36章のうち若干の章は，今日の複式簿記の見解に従えば，簿記の領域に属するものではない。
48 同上書，45-47頁参照。
49 同上書，49-50頁参照。
50 同上書，63-65頁参照。
51 片岡義雄他訳，前掲書，122頁参照。
52 片岡義雄，前掲書，73-81頁参照。
53 同上書，85-125頁参照。
54 同上書，133-214頁参照。
55 同上書，216-249頁参照。

56　同上書，6頁。

57　同上書，8－9頁参照。コトルリイは同書において元帳，仕訳帳および日記帳のほかに控帳の必要性を説き，また損益勘定を設けなかったが，資本へ直接に決算記入を行ない，試算表の作成を提唱している。コトルリイの著書の重要性は，今日では複式簿記に関する本質的価値よりも，むしろ『スムマ』出版の36年前に氏の著書が完成していたという年代的意義にのみあるようである。蓋し同書は商事経営論に関する先駆的文献であって，正確には商業教育教科書と見なすべきものであるからである（片岡義雄他訳，前掲書，126頁および津田・加藤訳，前掲書，63頁参照）。

58　片岡義雄，前掲書，6頁参照。

59　津田・加藤訳，前掲書，61頁参照。

60　Weber, a. a. O., S. 9.

61　Sundhoff, a. a. O., S. 22f.

62　Bellinger, a. a. O., S. 29f.

63　Sundhoff, a. a. O., S. 23.

64　Bellinger, a. a. O., S. 30.

65　Leitherer, a. a. O., S. 41.

66　Ebenda, S. 42.

67　Sombart, W.: Der moderne Kapitalismus, 3. Aufl., München u. Leipzig 1919, 2. Bd, S. 150.

68　Sundhoff, a. a. O., S. 23.

69　Weber, a. a. O., S. 11.

70　Ebenda, S. 11f.

71　Bellinger, a. a. O., S. 30f.

72　Sundhoff, a. a. O., S. 24.

73　Bellinger, a. a. O., S. 31.

74　Sundhoff, a. a. O., S. 24.

75　Ebenda, S. 25.